
離婚まであと少し

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離婚まであと少し

【Nコード】

N0463BA

【作者名】

さくら

【あらすじ】

伯爵家の出戻り娘ファナは宰相から縁談を持ち込まれて困っていました。

亡き夫の思い出が美し過ぎて再婚の決意がつきませんでした。果してファナの決断は…。

恐らく亀更新になるかと思っています。

第1話（前書き）

作者が最近、夢で見たことを話しを広げて書いてみました。
お読みいただければ嬉しいです。

第1話

「きつと幸せになりますから、わが家の嫁に来ていただだけませんか？」

その言葉がすべての始まりでした。

私は伯爵家の出戻り娘・ファナ。伯爵令嬢として生まれ、王族であるケント公爵リチャードの妻であつたのは数年前のこと。

小さいときから決められた許婚同士だつた私たちは、若くして結婚した。

政略結婚とは思えないくらい私たちは仲が良く、このままずっと二人で年老いていくと思っていました。

それなのに、夫は突然亡くなつてしまつたのでした…。

王族の一人であつた夫リチャードは、隣国との戦争のために 将軍として隣国に旅立ちました。

もちろん、将軍とは言つてもいわば箔付けのようなもので、実際は部下の副官がその役割を務めていました。

だから誰もが役割を終えて無事に帰るだろうと思っていました。

それなのに、リチャードは隣国で戦死したと伝えられたのでした。リチャードは王族にしては珍しく前線で指揮をとり、その活躍は凄まじいものでしたが、部下を庇つて見事な戦死を遂げたのでした。

その一件で軍の士気がいやがうえにも高まり、隣国との戦争は勝利で終わりました。

夫リチャードはまるで神のように讃えられて、数年たったいまも語り種となっています。

しかし、私は結婚生活わずか1年で夫を失い、婚家を出て行かねばなりませんでした。婚家のケント公爵家は夫の弟が後を継ぐこととなり、兄の未亡人がいつまでもいても邪魔でしかなかったのでしょう。

”リチャードのことは早く忘れて、次の幸せを見つけてちょうだい。

”

そう言って義父母たちは私を実家に帰しました。

あれから数年後、いろいろな再婚話は来ましたが私はすべて断り、実家で亡き夫を思い、静かに暮らしています。

しかし、最近は周囲がうるさくなってきました。

神と讃えられている將軍の未亡人とはいえ、出戻り娘がいつまでも実家においては外聞が悪いのか、父母や兄弟が渋い顔を隠そうともしません。

どうしたものか。

といつても、いい思い出ばかりで再婚なんて考えることが出来そうもありません。

それにファナは噂で聞いていました。

すでに23歳の出戻り娘を妻に迎えたいという男たちの下心を。

国王陛下が、国のために夫を亡くした未亡人ファナを心にかけており、きつと妻に迎えれば出世は間違いないだろうとのことでした。だからこそ再婚など考えられませんでした。

そろそろ修道院に行つて静かに暮らそうかと考えていたそのとき、ある人物が訪ねてきてこう言つたのです。

「きつと幸せになりますから、わが家の嫁に来ていただけませんか？」

そう言つたのは泣く子も黙るこの国のやり手宰相であり、オルレアン公爵でもある人でした。

「宰相さま……いきなり、何をおっしゃいます。」

ファナはいきなり言われてどうしてよいか分からず戸惑つてしまいました。

「これは、驚かせてしまいましたね。しかし、ファナどのにぜひわが家の嫁になつて欲しくてこうしてお願いに上がった次第です……」

宰相はそう言つてファナに頭を下げます。

「おやめ下さいませ！宰相さまがそのようなことをなさるなんて…。

」
フアナはどうしてよいか分からず、すっかり戸惑ってしまいました。

機転をきかせた侍女に呼ばれた父のバロン伯爵は驚いた表情で部屋に駆けつけました。

「これは宰相さま。いかがなされましたか？」

誰か部屋にやってきたことに気がついた宰相が頭を上げて、にこやかな笑みで挨拶を交わしました。

「バロン伯爵どの、お邪魔をしております。」

「これは宰相さま。わが家においで下さるとは光栄の至りでございますが、娘が戸惑っているようで何用かお教え願えませんか？」

バロン伯爵は遠慮がちに宰相に尋ねます。

それを聞いた宰相はさも驚いたように、

「バロン伯爵どの、それをお聞きになるのですか…。以前から願っています縁談のことでございますよ。」
「やれやれと言うように答えます。」

バロン伯爵は苦笑いしながら、

「恐れながら宰相さま、そのお話しは先日お断りさせていただいた

かと存じます。」

「ええ、だから来たのですよ。ファナどのに直接お願いすれば承知して下さるかと思ひまして。」

不敵な笑みで宰相が答えます。

なつ、さすがはタヌキと言われるだけのことはあるな…。

一介の貴族の娘が宰相からの直接の縁談を断れないと知っていて…。

バロン伯爵はそんなことを思ひながら、

「さようでございましたか。しかし娘は…」

「父上、私からお話いたしますわ。」

ファナは父の立場を思い、口を開きました。

「ファナ…！」

バロン伯爵は心配そうにしながらも、娘の意思を尊重することになりました。

「宰相さま、とても有り難いお話しですが、私のような一度嫁に行った者よりは若く美しい令嬢の方が宰相さまのお家の嫁にふさわしゅうございますわ。丁重にお断り申し上げます。」

そう言つとファナは頭を深々と下げて宰相に礼をしました。

第1話（後書き）

お読みいただき、感謝いたします。
皆さま、よいお年をお迎え下さいませ。

第2話（前書き）

お待たせしました。

第2話

「いや、これはまいりましたな…。ファナどの、顔を上げて下され。これでは話しも出来ませんからな。」

宰相は苦笑いしながら好好爺のような態度で言いながら、チラリとバロン伯爵の方を見ます。

まだ、話しをする気なのか…。
まさにタヌキだな。

側にいたバロン伯爵は苦々しい表情で仕方なさそうに、娘のファナには気の毒でしたが、

「ファナ、宰相さまと話をしようではないか？恐れ入りますが宰相さま、こちらへお越し下さいませ。」

「あ、はい…。父上。」

ファナは複雑そうな表情で答え、侍女たちが用意した席に着きました。

「いや、バロン伯爵お気遣い恐れ入りますな。」

宰相もニヤリと笑って案内された席に着きました。

言わせたくせに…。

バロン伯爵はまたそんなことを思いながら、

「いえいえ、とんでもないことです。さあ、冷めないうちに紅茶をどうぞ。」

おべっかを使うようにバロン伯爵は下手に出て宰相の機嫌をとります。

「ではいただきます。」

そう言うとき宰相は紅茶のカップを手に取り、飲みはじめました。

バロン伯爵はファナに対して、すまないと言うように目配せをしました。

ファナの方も貴族の娘として生まれ育っていますから、なんとなく父の立場が分かりますから、

分かっておりますわ、父上。

と言うように頷きました。

二人のそんな空気を感じているのかいないのか、宰相は紅茶を飲み干すと、

「いや、美味しい紅茶ですなあ。バロン伯爵、これはもしや隣国から取り寄せたものですか？」

「は、ええ……。妻が隣国の紅茶を気に入っていますで、取り寄せたようでございますが、何か……？」

バロン伯爵が戸惑いがちに答えます。

「やはりそうでしたか。」

宰相はそう言っているとカチャリとカップを置きました。

「バロン伯爵、確かにこの紅茶は近隣諸国にも響き渡るほど美味しいものでございますが、ファナのがどう思われるか考えたことが
おありですか？」

フンと不敵な笑みを浮かべて宰相がバロン伯爵に尋ねます。

「どう、とは……？どういう意味でございますか、宰相さま？」

怪訝そうな表情でバロン伯爵が宰相に尋ねます。

「いやはや……。お分かりになりませんか？いかに美味しい紅茶と
はいえ隣国から取り寄せられるとは、これではファナのがいつま
でたつても亡き夫を忘れないと申しているのですよ。」

やれやれと言うように宰相が答えます。

「あ、それは……。」

バロン伯爵は気まずそうに言葉を濁しつつ、

今まで考えもしなかったことなので、あっと思いました。

「私の考えが至らなかったようで……。」

バロン伯爵は冷や汗をかいて答えます。

ファナはそんな父の姿を見て、

「恐れながら宰相さま、私は何も気にしておりませんわ。」

「ファナなのは父親思いですな。しかし、そういうことを言われるのは気にしている証拠ではないですか？」

宰相は絡みつくようにファナに尋ねます。

「あの、宰相さま…。少しお考えが過ぎるようでございますわ。私に気がしてないと申しているのですからそれでよろしいではございませんか？」

ファナは少し緊張気味でしたが、宰相相手に臆することなく答えます。

宰相は少し驚いた表情でしたが、やがてクスクスと笑いながら、

「ファナなどは度胸がありますな。他のご令嬢でしたら泣きことを言うところですが…。」

やがて宰相は顔をほころばせて、

「ファナどの、ますますわが家の嫁に迎えたくになりました。大事にいたしますゆえ、お願い出来ませんか？」

ファナはため息をついて、

「その件についてはお断り申し上げたはずでございますが…。それにお相手の方は私より年下と父上から伺っております。宰相さまほどのお家ならば、嫁ぎたいお若く美しい令嬢方がいくらでもおいでございましょう？」

「確かにそうですが…。しかしファナどの、私の口から申し上げることは出来ませんが、わが家に来ていただければきつとお幸せになります。それとも、わが家ではご不満ですか？」

「いえ、そのようなことは…」

ファナはここまで言われてさすがに返事に窮してしまいました。

「宰相さま、娘は戸惑っているようでございますゆえ今日のところはお帰り願えませんか？改めてこちらからお伺い申し上げますので。」

娘ファナが困っている様子を見かねたのか、バロン伯爵が助け船を出します。

宰相はファナとバロン伯爵を見比べて、ううんと考えているようでしたが、

「仕方ありませんな。今日は帰りますが、いいお返事を期待しておりますぞ。」

そう言つとさつと見を翻して帰って行きました。

残された二人の間にホツとしたような、どうしたものかというような空気が漂っていました。

「…ファナ、心配することはない。父が明日宰相さまにお断りして来よう。」

バロン伯爵が沈痛な面持ちでファナに言います。

「父上！それでは父上のお立場がありませんわ。」
ファナが慌てて父を止めます。

「しかしファナ、嫌なのであろう？」
バロン伯爵が戸惑いがちに尋ねます。

「はい、それは…。ですが、父上にいつまでもあまえてはいけませんので私、嫁ごうと思います。」
ファナは決心がついたのか、明るい表情で答えます。

「ファナ！無理をすることはないのだぞ。無論、このままずっと家におられては困るがいずれは考えてもらわねば困るが、いまだである必要はない。」

バロン伯爵はファナの手を取って、訴えるように言います。

「父上、ご心配には及びません。私にはリチャードさまとの思い出がありますからどこでも生きて行けます。それに、お相手の方も年下とのことですし、姉のように接してまいりますわ。父上、明日は宰相さまにお受けしますと申し上げて下さいませ。」

ファナは決心がついてサバサバした表情で、にっこり笑って答えます。

第2話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

思いがけずにたくさんの方にお気に入り登録いただいてビックリしております。

ありがとうございます。また書いていきますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0463ba/>

離婚まであと少し

2012年1月9日01時48分発行